様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３５４０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００７６９

研究課題名（和文）留学の効果を最大化する留学事前事後の教育プログラム開発のための基礎的研究

研究課題名（英文）A Preliminary Study for Developing Pre- and Post-Study Abroad Educational Programs to Maximize the Effect of Studying Abroad

研究代表者
山川　健一（Kenichi, Yamakawa）

安田女子大学・文学部・教授

研究者番号：００２７９０７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は北米の大学に5か月間の留学をした約60名の学生の留学前後の変容を量的・質的に分析したものである。学生の英語力は留学前後で有意な伸びを示したが、その伸びは異文化間能力の変化との有意な相関関係は示さなかった。学生の留学中の経験については、留学中のポートフォリオや留学後のアンケートとインタビューのデータの計量テキスト分析とTEAによる分析を行った。その結果、学生は異なる大学間で異なる経験をしていた。また、学生の性格は留学中の異文化への適応度合いに大きく影響していた。加えて、学生が属する実践共同体は留学中の大きなソーシャルサポートになった。以上を踏まえて、留学プログラム開発への提言を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
留学の効果に関する先行研究は膨大に存在するが、多くは単一または少数の要因に着目し、留学前後の変化について研究してきた。本研究では、学習者の英語力（TOEICによる3技能の測定）、異文化間能力（BEVIによる測定）、学習者の内面の変化に関するデータ（ポートフォリオ、アンケート、インタビュー）のように、異なる要因とデータ収集法を駆使して多面的に調査した点に学術的な意義がある。また得られたデータについて、学習者を集団ならびに個人として量的・質的に分析した点にも意義が認められる。また、そこから得られた結果に基づき、留学プログラムの運営、評価、開発の諸側面について提言を行った点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the changes experienced by approximately 60 students before and after a five-month study-abroad program. The students showed significant improvement in their English proficiency; however, this improvement did not show a significant correlation with changes in intercultural competence. Regarding the students' experiences during their study abroad, portfolio analysis during their stay, as well as post-study surveys and interviews, were conducted using quantitative text analysis and TEA. As a result, it was found that students had different experiences at different universities. Additionally, the students' personalities greatly influenced their degree of adaptation to different cultures during their study abroad. Furthermore, the communities of practice to which they belonged provided significant social support during their stay. Based on these findings, recommendations were made for the development of study abroad programs.

研究分野：English Language Education

キーワード：留学　留学の効果　留学プログラム　留学事前事後　外国語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

留学の効果については膨大な先行研究がある。様々な側面が分析されているが、これらの多くは留学の効果の一側面を個別に調査しており、これらの要因が互いにどのように関係しているのか、つまり総合的な留学の影響・効果という点では学術的に不明な点が多い。加えて、主に留学の前後の変化のみに焦点が当てられており、学習者の個別の経歴や外部要因、加えて留学の効果の持続性や長期的視点からの変容といった点まで射程に入れた研究は非常に少ない。以上のことから、留学による変容に関しては、多種多様な側面を同時に、そして継続的に見ていく必要があると考えられる。これらは最終的には、効果的な留学プログラムの開発につながり、社会的に大きなインパクトを得ることができる。

２．研究の目的

本研究は、日本人英語学習者を対象にして、「留学の効果」を最大化するための留学事前事後の教育プログラム開発に必要な基礎的知見を得ることを目的としている。具体的には、①留学中の学習者の情意的側面の変容や異文化間能力の伸長に学習者の英語能力や個人的特性はどのように関係しているのか、ならびに、②留学で見られた学習者の変容は帰国後にどのようなメカニズムで変化・減衰していくのか、について縦断的かつ総合的に明らかにすることを目的としている。具体的方法としては、①学習者集団を留学の前後計 3 年間かけて縦断的に調査し、留学の影響・効果の長期的変容を探る、②学習者の情意的側面、異文化間能力、個人的特性および英語能力を様々な尺度を用いて量的に測定する、③学習者の情意的側面については尺度を用いた測定のみならず、ウェブ型ポートフォリオを用いた記述や学習者へのアンケートやインタビューに基づく質的分析も行う。

３．研究の方法

本研究では、英語能力テスト（*TOEIC*®）や異文化間能力尺度（BEVI）や先行研究で用いられてきた主要な情意的側面の尺度(動機づけ、コミュニーションを取ろうとする意志、言語不安、自己効力感など）のデータについて量的に分析する。同時に、学習者の個人特性や留学前後ならびに留学中の経験や振り返りについては、アンケート、インタビュー、ウェッブ型ポートフォリオの自由記述等のデータを用いて、計量テキスト分析等の量的手法と TEA（複線径路・等至性アプローチ）等を用いたナラティブ分析（質的手法）を用いる。これらの観点の調査から得られた知見を基に、留学前後で行われる留学のための教育プログラムの在り方について示唆を得る。どのようなタイミングで、学習者のどの内的要因にどのように教育的介入をしていくべきなのか、そして、特に留学後については、どのようなサポートをすれば学習者の英語能力のさらなる向上や情意面での高い動機付けが維持できるのかについて考察する。

４．研究成果

2019 年末に発生した新型コロナの影響で留学グループの帰国後のデータ収集に多大な影響が出た。そこで研究期間を延長して第 2 グループのデータ収集を行うよう予定を変更した。その第 2 グループの帰国後のデータ収集が 2024 年 2 月から始まり、本研究期間終了後の 4 月以降にも延びているので、当初予定していた分析の結果は現時点ではまだ完全に報告できない。現時点までで明らかになっている研究成果の詳細については、発表論文等を参照していただきたい。ここでは、発表済または発表予定の研究成果についての概要を以下の (1)～(4) に分けて報告する。

(1) 異文化間能力の変化

本研究では BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) を用いて調査対象者の留学前後の異文化間能力の変容を調査した。以下が結果の概要である。（詳細は、山川健一. (2023).「海外留学プログラムにおける学生の変容：BEVI を用いた分析」『大学英語教育学会 中国・ 四国支部研究紀要』第 20 号、 55-72. を参照のこと）

- 留学前後でパーセンタイルスコアが 5 以上の低下を示したのは、BEVI の 17 の尺度のうち尺度 5（基本的な開放性）と尺度 11（自己認識）であった。
- 留学前後における BEVI の 17 の尺度の変化は、3 つの留学先で異なる変化を示した。
- BEVI の 17 の尺度のうち、異文化間能力の判定に最も用いられる尺度 15（社会文化的オープン性）と尺度 17（世界との共鳴）については、全員留学の学科に進学する学生でさえも一様ではない。出発前の段階でかなり異なる意識の学生が混在しており、加えて、留学後でさえもこのばらつきが収束しないことがわかる。
- BEVI の尺度 14（ジェンダー的伝統主義）に関して、本調査の学生（女子大学）は、他大学（男女共学）のデータと比較すると異なる特徴を示し、ジェンダー的伝統主義がより強いことがわかった。

**(2) 英語能力と異文化間能力の関係**

**3 つの異なる大学に留学した 56 名の学生に対して、異文化間能力の測定指標として BEVI を用い、英語力の測定指標として *TOEIC*® L&R と *TOEIC*® Speaking を用いて、留学前後の変化を測定した。その結果、*TOEIC*® L&R と *TOEIC*® Speaking の得点は留学前後で統計的に有意な伸びを示した。しかしながらその一方で、英語力と BEVI のそれぞれの得点の変化には留学前後で有意な相関関係は見られなかった。このことから、留学前後での英語力の伸びと異文化間能力の変化は必ずしも同時進行するものではない可能性が示された。この内容については、本報告書執筆時点（6 月）では未発表であるが、**The Relationship Between Japanese EFL Learner' **English Language Proficiency and Their Internal Transformation in a Study Abroad Context というタイトルで、The 63rd JACET International Convention (Nagoya、 2024) にて 8 月 28 日に発表予定である。**

**(3) 留学中の学生の経験**

**（以下の記述は、論文：山川, 2020; 2021; 2023a; 2023b、ならびに学会発表：山川, 2019; 2022a; 2022b; 2024 に基づく）留学中の学生の e ポートフォリオの記述、帰国後の振り返りアンケート、帰国後の半構造化インタビューなどのデータに対して行った計量テキスト分析と TEA を用いたナラティブ分析から以下のことが判明した。**

- **留学参加者の多くは小学校段階から学校教育以外の部分で英語学習を始めていたが、それでも留学前は留学に対してかなりの不安を抱く。**
- **留学中に学生が経験したことについては、「大学の授業とそこでの人間関係」「言語使用」「ホストファミリーと友人との交流」「振り返り」の 4 つにまとめることができる。**
- **異なる留学先（キャンパス）によって、異なる体験をしていると言える。この差はそれぞれのキャンパスでの生活様式に起因すると考えられる。よって、留学する場所の特性によって留学生活が大きく影響される可能性がある。**
- **学生は留学期間中、TEM 図における EFP へ向かうまでに細かいアップダウンを繰り返しており、そのアップダウンは多くの場合、現地の人とのコミュニケーションの量・頻度・質が影響している。**
- **留学中の学習者の「投資 (investment)」を促進したり阻止したりする要因として、学習者の日本で形成した（性格に起因する）思考様式やアイデンティティが挙げられる。これは現象や事実の認識の仕方、ならびに異文化や現状への適応度合いに大きく影響する。**
- **現地授業内での同じ国籍・大学の学生との母語でのコミュニケーションは少ない方が良い。**
- **現地での過ごし方と帰国後の *TOEIC*®の伸びが同調しているわけではない。**
- **学生のインタビューデータにおいて留学先での様々な集団との関わりを「実践共同体」（Community of Practice: CoP）と見なした場合、以下のような特徴がみられた。**
  - **① 自分が抱く「想像の CoP」と現実がマッチする場合にその CoP に満足する。**
  - **② 言語学習者としての自分への配慮がある場合にその CoP に満足する。**
  - **③ CoP としてのホームステイに満足する場合、他の CoP へのコミットメントが弱くなる。**
  - **④ CoP への参加を促す要因として、文化資本（cultural capital）の有無、日本（文化・語）に興味を持つ個人・組織の存在、CoP の目的・構成員が明確な場合、同じ大学の他の学生の存在、が挙げられる。**
  - **⑤ CoP への参加を阻害する要因として、地理的・地域的要因、不可抗力的な外的要因、ホスト内の家庭不和、同じ大学の他の学生の存在、が挙げられる。**
  - **⑥ CoP に間接的に影響する要因としては、学生はそれまでの人生における自分のアイデンティティ、が挙げられる。**
- **現地においては、何らかの「タスク」「プロジェクト」「課題」または「日常生活で自ら積極的に関わり問題解決する経験」は、その後の留学生活において大きな自信になるということである。このことから、周囲との交流の中で教室での 「言語学習者 (learner)」から CoP 内での「言語使用者 (user)」へ変容していると考えられる。**
- **学習者の属する CoP 内におけるソーシャル・サポートの存在が、学習者が様々な体験に向かわせる力となっている。**
- **たとえ CoP の中にいたとしても、「話す権利」は容易には得ることはできないことがある。Social agent としての自己の限界も存在する。**

**(4) 留学プログラムの開発への示唆**

**上記 (1)～(3) の結果を踏まえ、留学プログラム開発への示唆として以下の点が挙げられる。**

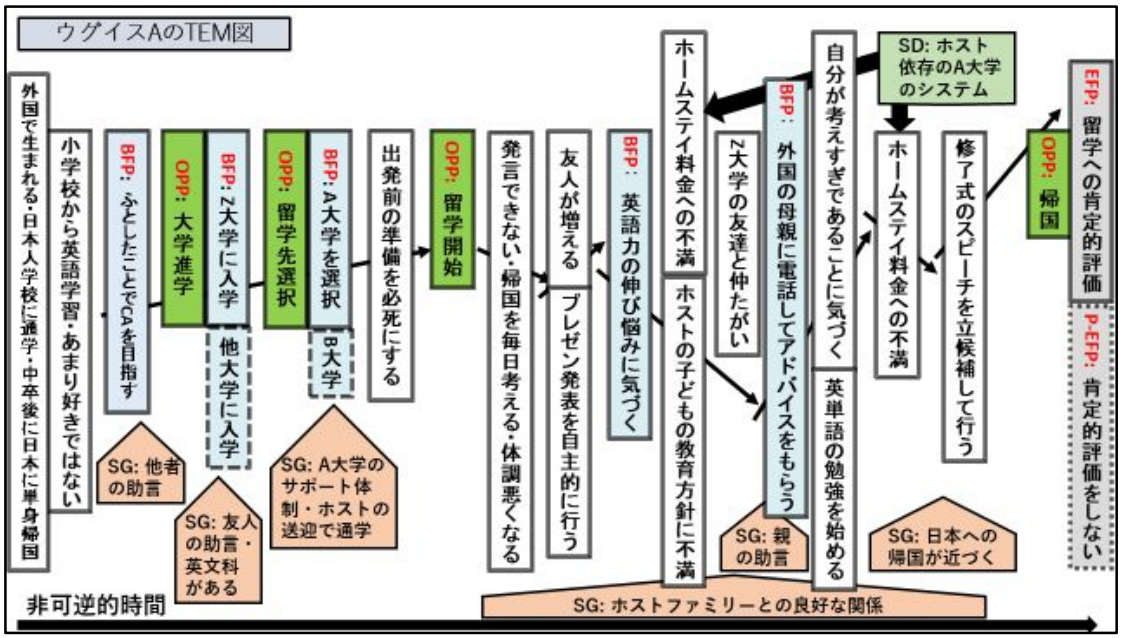
- **留学の事前・事後指導においては、留学に必要な語学力というものに対する認識を少し改める必要があるかもしれない。例えば、帰国前後の英語力の変化は「聞く」と「読む」の 2 技能のみの *TOEIC*®でなく、「話す」能力も測定するテストや、異文化対応能力の測定ツールなども取り入れることが考えられる。また留学前には、現時点の自分の英語力で最大限のコミュニケーションを成立させるために、コミュニケーション・ストラテジーを指導することも有効であるかもしれない。いずれにせよ、その留学プログラムが育成しようとしている側**

面を総合的に評価できるシステムを構築する必要がある。

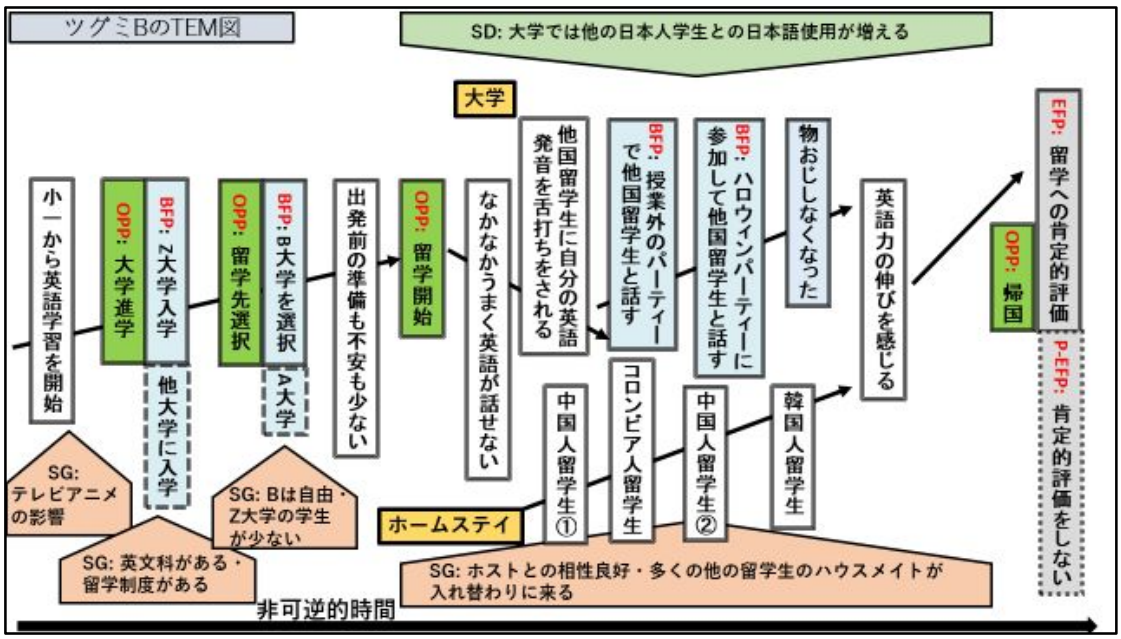
- 留学の事前指導では、留学先の大学や地域の特徴について、留学実施側は（バイアスのないように）事前によく周知させなければならない。また、参加者はそのことをよく理解しておく必要がある。
- 同じ留学地に行く同じ大学の日本人学生への互いへの関わり方に関する教育が必要である。
- 留学前に自分のアイデンティティを振り返る作業を行い、自分の思考・行動パターンの特徴を客観的にある程度把握しておくことは有効であるかもしれない。
- 人の信念・価値観レベルでの行動を他者が制御することは不可能であるので、留学の事前指導でできることとしては、文化間や個人間における信念・価値観による違いが、どのような異文化間衝突をもたらす可能性があるのかについて、異文化間コミュニケーションにおけるケース・スタディを紹介することなどが考えられる。
- 学生は留学先で所属するための複数の CoP が必要である。ホームステイ（または寮）と大学の授業以外の「第 3 の居場所」が提供される留学プログラムを構築することが望ましい。
- 留学プログラムの運営には多大な時間と労力を要する。「プログラムの評価」は単なる運営以上の内容に関わってくる。それをどこまで行うためには、人的、財政的、教育的配慮とサポートが必要である。よって、「プログラム運営」にかかわる部門と、「プログラム評価」に関わる部門が分離する必要があるのではないか。

（参考資料：学生 2 名の留学中の TEM 図）

・学生 A（ウグイス A）




（学生 B：ツグミ B）



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山川健一 | ４．巻<br>32 |
| ２．論文標題<br>複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた留学時の内面的変容に関する考察 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>英語英米文学論集 | ６．最初と最後の頁<br>11-33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山川健一 | ４．巻<br>20 |
| ２．論文標題<br>海外留学プログラムにおける学生の変容：BEVIを用いた分析 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>大学英語教育学会 中国・四国支部研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>55-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山川健一 | ４．巻<br>第30号 |
| ２．論文標題<br>複線径路等至性モデリングを用いた留学についての語りの分析 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>英語英米文学論集 | ６．最初と最後の頁<br>51-69 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山川健一 | ４．巻<br>25 |
| ２．論文標題<br>留学での経験を可視化するための量的・質的分析を用いた基礎的研究 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>安田女子大学大学院紀要 | ６．最初と最後の頁<br>43-54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた留学時の内面的変容に関する考察 |
| ３．学会等名<br>TEAと質的探究学会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>海外留学プログラムにおける学生の変容：BEVIを用いた分析 |
| ３．学会等名<br>大学英語教育学会 中国・四国支部秋季研究大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>日本人英語学習者の留学時のアイデンティティ形成プロセスに関する一考察 |
| ３．学会等名<br>第40回異文化間教育学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kenichi Yamakawa |
| ２．発表標題<br>Study Abroad Experiences as Narratives:A Preliminary Investigation Using the Trajectory Equifinality Approach |
| ３．学会等名<br>The Eighth CLS International Conference (CLaSIC 2018)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>留学の効果と留学プログラムの評価の動向 |
| ３．学会等名<br>第25回大学教育研究フォーラム |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>コロナ禍の海外留学におけるプログラム運営と参加学生の体験 |
| ３．学会等名<br>第29回大学教育研究フォーラム |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>留学における学生の変容：BEVIを用いた分析を中心として |
| ３．学会等名<br>J-CLIL第2回中国支部研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山川健一 |
| ２．発表標題<br>海外留学における実践共同体の中での学びと変容 |
| ３．学会等名<br>第30回大学教育研究フォーラム |
| ４．発表年<br>2024年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|